

〔研究論文〕

## まちづくりにおける市民の討議の可能性 (2) — 茅ヶ崎市市民討議会を事例に

山田 修嗣

〔Articles〕

## The Possibilities of the Citizens' Deliberation in Community Development (2) — A Case Study on the “Shimin-Togikai” in Chigasaki City

Shuji YAMADA

### Abstract

This article is the second report on the “Shimin-Togikai” in Chigasaki city, which is dealing with next points; A) to describe the significant features on Citizens' Deliberation in Chigasaki city and B) to argue the meaning on Citizens' Deliberation for citizens and local governments. This is a tentative analysis on Citizens' Deliberation in Chigasaki city through the experiences on planning and managing the deliberation in 2023.

The “Shimin-Togikai” has already become an annual event in Chigasaki City, and we were able to hold it successfully in 2023 as well. 27 citizens had got together in Chigasaki municipality office and discussed on Chigasaki's current policy on “Cultural and Lifelong Learning plan”. It was very fortunate that the participants were able to gather together again this year and have face-to-face discussions. All the participants spoke passionately about the given theme.

The Citizens' Deliberation is attracting worldwide attention as an “another” way to express opinions, separate from individual opinions and aggregated results from questionnaires. That is why the local government can compare the “discussed opinions” with individual opinions and survey results, and consider what commonalities and differences exist. In this way, the discussed opinion of the citizens will be connected in many ways for a better plans or policies for Chigasaki City.

This is not only having the hints for continuing the Citizens' Deliberation itself, but also refining the importance and possibilities of the deliberation. Then, we will be able to think the utilization of the Citizens' Deliberation.

### 1. 本稿の課題と構成

本稿は、茅ヶ崎市市民討議会の様子と結果を記述することをねらいとする、継続研究の報告である。筆者は、同実行委員会に参加しながら、茅ヶ崎市市民討議会の企画と運営にかかわっている。この経

験から、A)「市民」の「話し合い」の特徴を記述し、B) 市民討議会が市民と自治体にどのような意味を持つか、この暫定的な検討を主眼とする。2022 年度開催分の内容報告に続き、これは 2023 年度分の討議会実施レポートである。

茅ヶ崎市市民討議会は、2009 年度からつづく同市の恒例行事である。基本的には年度内に 1 回の開催であるが、同市の希望によって、年度によっては複数回の実施をしたこともあった。また、新型コロナウイルス感染症によるやむなき中止をはさんではいるものの、ほぼ毎年、討議会は開催されている。

このときに課題となるのは、継続性の受けとめ方の問題である。討議会の開催が続いているとはいえ、企画・運営側にメンバーの固定があるわけではない。実行委員会を構成する茅ヶ崎市、茅ヶ崎青年会議所、文教大学の実情を紹介すれば、この課題は明らかとなる。

まず、自治体職員は、異動によって、テーマによって、討議会の担当者が変わることが前提である。開催事務局は市民自治推進課に固定されているが、スタッフの異動は避けられない。また、茅ヶ崎青年会議所においても、例年 2 名ほどの討議会担当者は単年度で交代となる。さらに、同会議所の年間計画が 1 月から 12 月までを期間としているため、自治体の 4 月スタートの年度とは異なる動き方をしている。当然、同一年度内に、会議所の担当メンバーが交代することになる。加えて、討議会に参加する市民は、毎回、抽選によって選ばれる。つまり、よほどの「運」がない限り、討議会への複数回の参加経験を有する市民はほとんどいないと考えられる。

したがって、市民討議会の実施経過は長く、実施回数も積み重ねているとはいえ、茅ヶ崎市の討議会の記録を残さなければ、その経験が市内に蓄積されるのは難しいと思われる。さらには、各回の参加者と実行委員会の貴重な経験を軸に、次の討議会をいっそう充実させることも難しい。記述の必要性は、こうした討議会そのものが有する意義と限界に由来する。

上述のような問題意識から、本稿は、市民討議会の経過と経験をできるだけシンプルに記述する。これが第 1 の目的である。第 2 に、市民討議会が茅ヶ崎市民と同市にとってどのような意義を有するか、再確認することである。抽出によって選ばれた市民が討議を行う場という性質から、少なくとも、討議（話し合い）そのものを安定的に成立させるために、なぜ討議会が重要なのかを参加者に認識してもらう必要がある。もちろん、これは、茅ヶ崎市の計画づくりや職員の活動においても意味がある。つまり、市民討議会をどのように開催し、どのように市民に話し合ってもらい、その意見の束をどのように施策へと活用するかという問いへの答えだからである。

以上の目的と問題意識にもとづいて、本稿は以下の構成とする。まず「2.」で、茅ヶ崎市市民討議会の概要と、2023 年度実施分のあらましを紹介する。つづく「3.」では、2023 年度茅ヶ崎市市民討議会のアンケート結果を紹介する。討議会は参加者数が少ないため、統計的な分析にはなじまないが、ここで、討議会経験者となった参加者の思いを集約する。さらに「4.」で、討議後の参加者の感想を、今回の討議会のテーマである文化・生涯学習の考え方に関連付けて紹介する。最後に「5.」で、市民討議会に参加し、討議経験をえた市民参加者と、それを企画し、会場で討議を見守ったテーマ担当とのつながりについて提案する。ここから、これからの討議会に必要な、若干の示唆を提示したい。こうした情報によって、討議会の継続性へとつながる条件を見つけ出し、次の討議会（2024 年度実施分）へのヒントを示したい。

## 2. 茅ヶ崎市市民討議会の概要と経過

### 2-1. 市民討議会の形と必要性

茅ヶ崎市は、神奈川県湘南エリアにある、人口約24万人のまちである。同市のホームページ（HP）によれば、およそ6キロメートル四方（面積は35.7平方km）の範囲なので、他市と比べると比較的密集した、コンパクトな都市といえる。

コンパクトなまちだから、市民の参加を期待し、参加型のまちづくりを実現させているというわけではない。仕組みを整備し、参加をすすめている。そして、茅ヶ崎市が市民討議会に期待している内容がある。それは、市民の意見や提案を市政に反映するため、参加経験の少ない人にもその門戸を開く目論見である。

もちろん、同市でも、パブリックコメント手続きや審議会における市民委員などは採用されており、さらに、市民が参加しやすい環境整備にも取り組んでいる。それでも、まだ参加の可能性がある市民がいるという発想が、こうした取り組みの根幹にあるという。このとき、市民討議会の参加者選びにおいては、住民基本台帳からの「抽出」による手続きをとる。そのため、より幅の広い層からの参加者確保に期待することができる。このような手段への期待感が存在し、市民討議会はとくに行政側に注目されている。これが、茅ヶ崎市において討議会がつついている理由の1つとなっている。

繰り返し述べられるように、市民討議会の特徴は、(1)参加者の「抽出」、(2)グループによる「話し合い（討議／グループ討議）」、(3)話し合いにもとづく「意見集約」というそれぞれの過程が含まれる点にある（茅ヶ崎市：2015）。市民討議会における「抽出」の事実上、「ミニ茅ヶ崎」（前掲書）とも表現される、市内の幅広い層の参加者が想定され、実際に「ミニ茅ヶ崎」が実現していることも確認されている（前掲書）。

こうして、「抽出」が有する良好な影響をイメージし、この影響によってさらに良好に変化するであろう「話し合い」と「意見集約」にいつそう期待することができる。これが、市民参加手法としての市民討議会の特徴といえるだろう。

### 2-2. 茅ヶ崎市の市民参加と討議会への期待

茅ヶ崎市の現状認識と課題感覚にもとづいて、市民討議会は検討され、企画され、運営されてきた。そして、この運営実績とともに、とくに市民意見の重要性と市民参加の必要性が、テーマ担当課、担当事務局、実行委員会内で再認識されるようになっていく。

たとえば、2023年度の討議会企画にあたり、市役所各課から複数のテーマ候補が実行委員会に提案された。その中には、複数回の提案をしてきたセクションもあれば、タイミングとテーマの掲げ方を若干アレンジした（同種の）テーマを繰り返し提示してきたところもあった。つまり、茅ヶ崎市には、その分だけ市民討議会の意義に期待し、討議の結果を参考にしたいと考えるセクションがあるということになる。

もっとも、市民討議会は、テーマ出しを始めとする事前の準備がなかなかたいへんで、参加者にたずねる論点も慎重に吟味したものでないと、苦勞した割には話し合いの成果が出ないといった感想を聞く場合もある。単純に「意見を述べてください」、「思いを語ってください」といった問いかけで、市民のアイディア出しに終止してしまうと、市民から、「それならば、討議会である必要がなく、アンケートなどで代替可能ではないか」という感想をつきつけられることにもつながってしまう。また、

筆者の個人的な感想も交えれば、担当課の職員が聞きたいことを明確に表現し、それをどのように話し合ってもらえるかなどのビジョンがなければ、事前準備も難しい。

こうした状況を回避するため、茅ヶ崎市では討議会開催ごとに実行委員会を立ち上げて、自治体と市民が協力して準備を行っている。そして、この実行委員会が、テーマ案の選定、テーマ策定のための言葉選び、討議内容の吟味、討議の進行の想定、討議進行のためのキーワード出し、模擬討議の実施（予行演習）などを担っている。このようにして、実行委員会はテーマ担当課と一緒に討議会を企画・運営している。実行委員会という第三者的な組織がかかわることで、茅ヶ崎市のオリジナルな市民討議会が形をなしている。この形態と準備のあり方に、庁内各課も期待しているといえそうである。

### 2-3. 2023（令和5）年度の市民討議会

2023年度の市民討議会は、8月20日（日曜日）の13時から16時まで、同市役所本庁舎4階の会議室にて開催された。

今回のテーマ（全体テーマ）は、実行委員会により、「語りませんか？ あなたの推しのチガサキカルチャー～地域で学び続けるワクワクを、話し合いと創造力（クリエイティビティ）で新発見～」と定められた。20歳代の若者にも参加してもらいたいとの思いから、「推し」などの言葉、カタカナ語の多用によってイメージを形にしたテーマである。また、この決定過程においては、本学学生、大学院生の協力も得た。実行委員会で、こうした年代の日常感につなげられるような言葉をあげてもらい、いくつかの候補の中から上記テーマにつながる言葉選びを行った。

また、「チガサキカルチャー」や「想像力（クリエイティビティ）」などのキーワードは、今回の討議内容である次期「茅ヶ崎市文化生涯学習プラン」（文化推進課）の策定をイメージした関連語である。このプランは、令和6年度から12年度までを計画期間とし、「これから求められる市民の文化的な諸活動と、生涯学習の必要性をまとめる計画」（同課）である。このプランづくりのために、「身の回りの学び・サークル活動・趣味（音楽・芸術等）などを足掛かりに、茅ヶ崎市での文化芸術・生涯学習の活用アイデアや新たな役割・価値などについて、参加者の皆さんに自由に話し合ってもらったための討議会を構想した。

そして、今回も市民の心理的な参加障壁を下げる目的で、半日開催（午後に集合してもらい、3時間の討議会）で実施することとした。茅ヶ崎市実行委員会では、3時間開催の場合、約40分のグループ討議を2回行うのが適当と判断されるようになっており、次第にそれが一般化されつつある。そのため、短時間での自己紹介に心がけ、グループ討議を着実に進められる時間の確保を意識した構成とした。

さらに、円滑な話し合いに必要なアイスブレイクの時間を、できるかぎりグループ討議の内部に含む形で企画することとした。そして、前年にひきつづき、参加者間で継続性のある話し合いをしても目的から、2回の討議はグループのメンバーを変えない（シャッフルしない）方法を採用した。

このように設定した2回のグループ討議は、担当課からの積極的な提案もあり、次の討議（個別テーマで話し合ってもらったこととした。まず、討議1は「あなたが考える文化・生涯学習とは」とし、討議の入口を構成する話しやすい話題で始めることとした。とくに、参加者が日常的に接点をもつさまざまな文化について、そのイメージや思いを語ってもらったねらいがあった。つづく討議2は、「チガサキカルチャーを活かした、チガサキのまちづくりを考える」とした。ここで参加者には、市民の文化感覚をいかした、茅ヶ崎らしい文化活動の論点を取りまとめ、それによって得られるまちづくりの効果や可能性について話し合ってもらったこととした。

いずれの討議に際しても、話し合いの前に、参加者への情報提供を行った。討議1では、文化推進

課職員の概要説明に加えて、専門家（野田邦弘氏、横浜市立大学客員教授）による文化・生涯学習の理念とそのまちづくりにおける意義の紹介があった。そして討議2では、野田氏による事例紹介をもとに、文化・生涯学習をまちづくりに活用する具体的なアイデアを説明してもらった。どちらも短時間の情報提供であったが、話し合いの前に全員が同じ情報を聞き、話し合いの方向性をおよそ確認するのに役立った。

#### 2-4. 参加者の抽出と出席状況

以上のように、全体テーマと討議テーマを決めた後、実行委員会では参加者の抽出について検討した。過去の承諾率や参加率も参考にして、今回、参加者（36名＝6人×6テーブル）を集めるのに適切と思われる招待状発送数を2,000通と想定した。そして、2,000人を年齢別にカテゴリー化して、そのカテゴリーごとの抽出数を決めた。とくに、担当課は、若者の参加を期待していたこともあり、若年層の抽出数を多くすることとした。文化・生涯学習について市役所に積極的に意見を伝えるのは、高齢層に多く、若年層に少ない傾向があるからだという。こうして、全体テーマを記載した招待状（討議テーマは討議会当日、会場で発表）が、抽出された市民に発送された。

その結果、当日の参加者は27名（男性12名、女性15名）であった。直前のキャンセルなどもあり、36名には到達しなかったが、1グループあたり4～5人の参加者となるようグループ編成を再調整し、予定通り6グループでの話し合いを実施した。これらの状況は、図表1に示す。

図表1 令和5年度第茅ヶ崎市「市民討議会」の参加者内訳

年齢層	抽出数	参加者（割合は年齢層別）			年代別の参加比率	参加率 (参加者数÷抽出数)
		男性	女性	合計数		
18～34歳	850	5	8	13	48.1%	1.5%
		38.5%	61.5%			
35～49歳	550	3	3	6	22.2%	1.1%
		50.0%	50.0%			
50～64歳	350	3	1	4	14.8%	1.1%
		75.0%	25.0%			
65～89歳	250	1	3	4	14.8%	1.6%
		25.0%	75.0%			
合計	2,000	12	15	27	100.0%	1.4%
		44.4%	55.6%			

市民討議会実行委員会編（2024）

### 3. 2023（令和5）年度討議会のアンケート結果

ここから、「参加者アンケート」の結果を確認する。例年、茅ヶ崎市は参加者アンケートとして、「事前」と「事後」の2種類のアンケートを実施している<sup>1</sup>。いずれも、討議会の参加決定者にたずねる質

1 このほかに、招待状が届いても参加を承諾しない人を対象とする「不参加者アンケート」（今回の有効回答数360）を実施している。

## まちづくりにおける市民の討議の可能性 (2)

問紙調査である。ただし、「事前」は、討議会開催前に質問紙を事前配布（郵送）し、記入してもらう方法をとっている。これにたいし、「事後」は、討議会終了直後に会場で質問紙を配布し、その場で記入してもらう方法を採用している。今回の回答数は、「事前」が29件、「事後」が27件であった。

限られた回答者の少数の回答ではあるものの、市民討議会を体験する前後の、当事者の率直な意見や反応を確認するために、回答の傾向把握は重要である。とりわけ、事後アンケートは討議会の終了直後に配布し、参加者に記入してもらうため、参加者のタイムリーな感想を記載してもらうことができる。記載・提出後すぐに会場を後にすることができる気軽さも、負担感の軽減につながっており、書面で問う意味がある。以下、これらの結果を、市民討議会実行委員会編（2024）「令和5年度『市民討議会』報告書」のデータを引用し、確認する。

### 3-1. 事前アンケート

事前アンケート（回答数29）では、参加者の職業、家族形態、住居形態なども聞いているが、ここではポイントを話し合いの意義に絞って、設問を限定して確認する。なお、設問ごとに、無回答や記入ミスが含まれるなど回答数のばらつきはあるが、回答数29を分母にすべての割合を求めた。

まず、参加者の居住年数を聞いた（図表2）。その結果、「20年以上」の市内居住者が34.5%と最も多かった。そして、「1年～5年未満」が20.7%、「10年～20年未満」が13.8%とつづいた。また、「生まれてからずっと」（この選択肢のみ重複選択可）が27.6%であった。参加者の多くは比較的長期間、茅ヶ崎市に住んでいる。よって、茅ヶ崎の地域事情に詳しく、自分たちの生活実感とともに討議を行う人たちだったのではないかと考えられる。他方で、今回は若年層の抽出数を多くし、出席者も多かったため、1年～5年未満の割合が高まったようである。

図表2 市内での居住年数（6については重複選択可）

		n	%
1	1年未満	1	3.4
2	1年～5年未満	6	20.7
3	5年～10年未満	3	10.3
4	10年～20年未満	4	13.8
5	20年以上	10	34.5
6	生まれてからずっと	8	27.6

市民討議会実行委員会編（2024）

〈上述の通り、割合（%）の分母は29としている（以下の図表5まで同様）。〉

次に、市内での定住の意向では、「住み続けたい」が37.9%で最多であった。また、「できれば住み続けたい」が24.1%で、これらを合計すると、約6割（62.0%）が茅ヶ崎での「定住」を希望していることがわかる（図表3）。反対に、「わからない」という回答も34.5%と、3分の1をこえた。定住希望が強い場合、その市民は茅ヶ崎市をさらに「暮らしやすいまち」、「望ましい地域」にしたいという思い、あるいは、今の「良さ」を維持したいとの意見をもつ可能性があるだろう。他方で、「わからな

い」という場合、コロナ禍で変化したオンラインワークなどの働き方が、この段階にきてさらに変化する可能性を考えているのかもしれない。こうした背景も、討議の質につながるものと考えられる。

図表3 茅ヶ崎での定住の意向 (○は1つ)

定住の意向		n	%
1	住み続けたい	11	37.9
2	できれば住み続けたい	7	24.1
3	できれば転出したい	1	3.4
4	転出したい	0	0.0
5	わからない	10	34.5
6	その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編 (2024)

さて、参加の動機についてしてみると、「市民討議会の手紙 (参加依頼) が届いて、どのように感じましたか (いくつでも○)」の回答として、「面白そう」が62.1%で最多であった (図表4)。また、「良い取組」と「新しい取組への期待」がそれぞれ20.7%で並んだ。そして、「選ばれてよかった」が10.3%という結果であった。討議会にたいするかなり好意的な受け止めがあったことがわかる。

図表4 市民討議会の手紙 (参加依頼) が届いて、どのように感じましたか (いくつでも○)

		n	%
1	面白そう	18	62.1
2	良い取組	6	20.7
3	新しい取組への期待	6	20.7
4	選ばれてよかった	3	10.3
5	なぜ討議をするのか不明	3	10.3
6	実際に何をするか不安	3	10.3
7	つまらなそう	0	0.0
8	とくに感想はなかった	2	6.9
9	その他	1	3.4

市民討議会実行委員会編 (2024)

このように、招待状に積極的で良好な印象を受けており、ここから参加してみようという思いにつながったのではないかとことがわかる。しかし、「なぜ討議をするのか不明」、「実際に何をするか不安」がそれぞれ10.3%と、参加依頼の書面だけでは「わからない」という種類の「不安」も感じられていた。これは市民討議会が、「詳しい情報は当日に説明する」ことを基本方針としていることと関係しているだろう。その方針の理由は、先入観なく、日頃の市民感覚で、提示されたテーマについて

## まちづくりにおける市民の討議の可能性 (2)

話し合ってもらいたいという理念ゆえである。そこで、このポイントが、市民討議会経験後にどのように変化したか、確認する必要がある。

さらに、「討議会への参加の決意」をたずねると、「市民討議会が興味深かった」が55.2%、「新しいことにチャレンジしたかった」が34.5%、「テーマが興味深かった」27.6%、「市のために協力したかった」が13.8%、「市民の役割として大切だと思ったから」が10.3%という結果だった（図表5）。市民討議会という手法や討議テーマに興味をいただいた場合、あるいは、市のイベントに積極的にかかわろうとする気持ちがあった場合に、参加への決意につながったことがうかがえる。また、「日程的に都合がよかった」も17.2%で、時間があえば参加依頼に応じようとする市民が一定程度いる点にも注目すべきであろう。

図表5 なぜ討議会への参加を決意しましたか（いくつでも○）

参加の決意		n	%
1	市民討議会が興味深かった	16	55.2
2	テーマが興味深かった	8	27.6
3	日程的に都合がよかった	5	17.2
4	市のために協力したかった	4	13.8
5	市民の役割として大切だと思った	3	10.3
6	新しいことにチャレンジしたかった	10	34.5
7	市からの手紙に参加しなければならないと思った	1	3.4
8	日頃から市に言いたいことがあった	0	0.0
9	その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

### 3-2. 事後アンケート1：参加者の感想や印象

前述の通り、事後アンケートは、市民討議会終了直後に、会場で参加者に質問紙を配り、回答を記入してもらった。おもに、討議会の開催方法や討議の内容について、討議会体験後の率直な意見を聞くこととした。

まず確認するのは、参加者の全般的な「感想や印象」である。この設問はA～Lまでの12項目について、「そう思う」から「そう思わない」までの5段階で評価をしてもらった。結果は図表6に示す。多数の設問が含まれるため、いくつかのブロックにわけて確認する。



図表6 今回の市民討議会について感想や印象をお聞かせください (○は1つ)

		そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらとも 言えない	どちらかと言えば そう思わない	そう思わない
A	市民討議会はおもしろかったですか	77.8%	11.1%	7.4%	3.7%	0.0%
B	討議会の進め方はわかりやすかったですか	37.0%	40.7%	3.7%	14.8%	3.7%
C	進め方に関する説明は十分だと思いましたか	37.0%	29.6%	22.2%	11.1%	0.0%
D	冒頭の自己紹介で話しやすくなりましたか	55.6%	37.0%	7.4%	0.0%	0.0%
E	各回の情報提供で、討議がおこないやすくなりましたか	37.0%	33.3%	22.2%	3.7%	3.7%
F	討議1のテーマは、話しやすかったですか	37.0%	48.1%	11.1%	0.0%	3.7%
G	討議2のテーマは、話しやすかったですか	19.2%	46.2%	19.2%	7.7%	7.7%
H	討議を通して自分の考えが深まりましたか	55.6%	33.3%	7.4%	0.0%	3.7%
I	グループ発表は、全員の意見が十分反映されていましたか	48.1%	37.0%	11.1%	3.7%	0.0%
J	各班の討議報告で、他の参加者の意見がわかりましたか	74.1%	22.2%	3.7%	0.0%	0.0%
K	討議会は市民の声を反映させるのに有効な手法と感じましたか	40.7%	40.7%	18.5%	0.0%	0.0%
L	市民が「まちづくりの主役」という印象が強まりましたか	42.3%	38.5%	11.5%	7.7%	0.0%

市民討議会実行委員会編 (2024)

はじめに、設問A～Cの回答結果を確認する。これらは、市民討議会のおもしろさ、わかりやすさをたずねている。

A「市民討議会はおもしろかったですか」は、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計が約9割(88.9%)であり、「どちらとも思わない」が7.4%、「どちらかと言えばそう思わない」が3.7%という結果だった。おおむね、事前アンケートの状況と重なる、肯定的な感想だったことがわかる。

B「討議会の進め方はわかりやすかったですか」は、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計が77.7%だった。他方で、「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」の合計が18.5%であり、A～Lまでの回答のうちこの割合の合計が最も高かった。また、「どちらとも言えない」は3.7%だった。事前感じられていた「わからないこと」への「不安」解消は、この結果から、反省点が残った。つまり、実際に討議を体験してみても、当日の進行面において十分な理解につながったとはいえない場合があったようである。

C「進め方に関する説明は十分だと思いましたか」についても、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計が66.6%であった。Aの「おもしろかった」の結果と比べると、20ポイント以上も下回っていた。また、「どちらとも言えない」が22.2%、「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」の合計が11.1%という結果だった。よって、討議会の進行については、説明方法や討議開始前の時間の制限があるものの、参加者によりていねいに説明しておくべきではないかと考えられる。加えて、グループ討議の進行についても、参加者にわかりやすいファシリテーションが求められていると思われる。ただし、この問題は、過去の参加者の意見も含め、より慎重に対策が検討されるべきであろう。つまり、冒頭の説明が長くなると「参加者が話し始めるまでに時間がかかり、討議し

ている実感がわからない」という意見が寄せられる。ていねいでテンポの良い説明とともに、参加者に討議実感を得られるような適切な「話し合いへのかわり」の工夫が不可欠となっているようである。

次に、設問 D～G では、グループ討議の話しやすさにかんして聞いている。

D「冒頭の自己紹介で話しやすくなりましたか」は、92.6%が「そう思う」か「どちらかと言えばそう思う」に回答していた。「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」を選んだ人はいなかった。これまで、討議の冒頭には会場全体でアイスブレイクを行うこともあったが、今回は討議グループ内での自己紹介とした。話しやすさが感じられていたという結果より、自己紹介もアイスブレイクと同等の役割を果たしていたといえるだろう。あわせて、グループ内で自身を紹介する機会が、メンバーの話しやすさにつながっていたと考えられるだろう。

E「各回の情報提供で、討議がおこないやすくなりましたか」では、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計が70.3%となった。「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」の合計が7.4%と多くはなかったが、「どちらとも言えない」が22.2%という結果だった。今回のテーマは文化・生涯学習を切り口としているが、これが地域の良さやまちづくりにつながっているという部分は日頃の生活感覚とは異なっており、イメージしにくかったのかもしれない。

FとGは、各討議の「話しやすさ」を聞いている。F「討議1のテーマは、話しやすかったですか」については、「そう思う」か「どちらかと言えばそう思う」を選択した人は85.1%だった。しかし、G「討議2のテーマは、話しやすかったですか」の同割合は65.4%と、20ポイント近くの開きがあった。そして、Gの「そう思う」の割合は19.2%と、他の回答結果に比べて最も低かった。さらに、Gにたいする「そう思わない」と「どちらかと言えばそう思わない」の割合が15.4%と高くなっていた。これをFにたいする同割合の3.7%と比べると、「話しやすさ」の点で明らかな違いが見られた。また、Gの「どちらとも言えない」の回答も19.2%と約2割であった。よって、今回のグループ討議にたいしては、参加者の強い否定感や不満足感はなかったと考えられるものの、とくに、討議2の話題や進め方にやや難しさを感じられたといえそうである。また、この項目の自由記述欄に、参加者によるまとめの報告（グループ発表）にむけた準備が十分にできなかったことが、討議2の感想として記載されていた。つまり、まとめの報告内容を議論し、報告する段階にまで練りあげる時間が足りず、まとめづくりが難しかったということであった。したがって、こうした話し合いにかんする参加者への要求レベルの設定や討議の時間設定も、話しやすさにつながるポイントとなっていたと推測される。

最後に、H～Lの設問では、参加者本人の気づき、意見や態度の変化をたずねている。これらへの回答は、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の割合がいずれも8割をこえ、肯定的な回答状況であった。

なかでも、特筆すべきは、J「各班の討議報告で、他の参加者の意見がわかりましたか」の結果である。「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計が96.3%であった。話し合いの場を作り、参加者が集まって討議し、それぞれの意見を聞きながら自分の考えをまとめる意図においても、また、参加者が当該の課題について意識を高め、市民としての気づきを得てもらう点においても、「他の参加者の意見がわかった」ことは好ましい結果だったといえそうである。

H「討議を通して自分の考えが深まりましたか」でたずねた参加者の「考え」の「深まり」や、I「グループ発表は、全員の意見が反映されていましたか」で聞いた議論の経過の意義と意見反映のための話し合いの重要さにかんする感想は、やはり、目的にそった良好な結果となったと考えられる。「そ

う思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計が、H：88.9%、I：85.1%であった。

K「討議会は市民の声を反映させるのに有効な手法と感じましたか」、L「市民が『まちづくりの主役』という印象が強まりましたか」の2つの設問にたいしても、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計がおよそ8割（K：81.4%、L：80.8%）であった。まずは十分な成果を得たと判断できそうである。ただし、この論点は、茅ヶ崎市が市民討議会をどのように活用し、そのうえで、市民に「まちづくりの主役」としてどのように行動してもらうかを検討するためのステップともいえる。よって、この成否は、茅ヶ崎市職員のこれからの検討と活用にかかっており、討議会の成果をうけた自治体の行政活動の変化に期待する。加えて、市民参加の手法が市民の主役感につながっている点では、ここで気持ちを高めた市民を、今後、行政活動にどのようにかかわってもらうことができるか、そのような参加の具体化の課題でもある。市民の活躍の場をどのように提示し、一般化させるか、茅ヶ崎市の検討と実動を楽しみにしている。

A～Lまでの回答傾向をふりかえると、市民討議会は、参加者にたいして「話し合う楽しさ」を提供できていたと考えることができるだろう（A）。ただし、討議のわかりやすさや進め方には、今後も慎重に検討する必要がある、会議設計の課題が明らかになったと考えられる（B、C）。

また、会場において話しやすい雰囲気は実感されているものの（D）、討議の進行に必要な情報提供のあり方には工夫が求められている（E）。とりわけ、討議1のように、開始後の自由な意見交換では話しやすいと感じられていたが（F）、反対に、自分自身の意見とその理由や解釈を披瀝して他者との意見構築をする場面や、メンバーの意見をとりまとめる段階となった討議2では、討議がやや難しいと感じられていた（G）。

そして、討議会の目的でもある、話し合いにもとづく意見集約の実践や、話し合いを通じた行政への市民参加のねらいは、およそ良好な成果を得たといえるだろう（H～L）。もちろん、ひきつづき、グループ討議にはさらに工夫を加え、適切な情報提供のあり方を検討した、望ましい茅ヶ崎市民討議会の会議設計は、実行委員会に提示された課題である。

### 3-3. 事後アンケート2：「話し合い」項目

ひきつづき、事後アンケート結果を確認する。

討議のおもしろさや話しやすさを説明するために、「グループごとの話し合いは、円滑に進みましたか」の回答状況を見てみよう（図表7）。

図表7 グループごとの話し合いは、円滑に進みましたか（○は1つ）

	n	%
円滑に進んだ	13	48.1
やや円滑に進んだ	10	37.0
どちらとも言えない	3	11.1
やや行き詰まったときがあった	1	3.7
何度も行き詰まった	0	0.0
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

## まちづくりにおける市民の討議の可能性（2）

この結果から、グループ討議はおよそ円滑（順調）に進んだと考えてよいだろう。

しかし、この設問の自由回答欄には、討議方法へのリクエストも記載されていた。たとえば、「発言数が多く、まとめる時間が足りないと感じた」、「もう少し討議の内容をしぼった方が良かったと思います」、「1つの意見に対してもっとじっくり話したい」などである。討議が円滑に進んだものの、（むしろそれゆえかもしれないが）それらを「まとめる」時間の確保が求められ、話題の分散がおきないような「内容の絞り込み」の必要性、議論を「深める」話し合いの工夫などが指摘されていた。これらは、ただ話し合えばよいといった理解をこえ、参加者が主体的に討議にかかわり、より大切な討議の到達点に気づいた証左といえるだろう。実行委員会として反省し、次の討議設計に大いに参考にしたい。

また、討議における「平均の発言回数」もたずねている。1回あたりの討議では「4～6回」の発言数が最多（29.6%）となった。このカテゴリーが最多となるのは、例年の傾向でもある。ただし、「10回以上」が22.2%であったこと、「1～3回」が25.9%だったことも勘案すると、発言に分散がみられ、多く話す人とあまり話さなかった人にわかれた可能性もある。グループが4～5人で構成されたこと、40分のグループ討議を行ったことを考慮すると、討議の話題をふまえて「語ることができた人」への発言の集中があったのではないかと推測される（図表8）。

図表8 討議の際、平均して何回くらいお話しされましたか  
(○は1つ)

	n	%
10回以上	6	22.2
7～9回	5	18.5
4～6回	8	29.6
1～3回	7	25.9
0回	0	0.0
わからない	1	3.7

市民討議会実行委員会編（2024）

さて、市民討議会の参加者は抽選で選ばれるため、たいてい、初対面の人とのグループ討議が行われる。そこで、「はじめて顔を合わせる他の市民との会話」を「どのように感じたか」を聞いた（図表9）。

図表9 市民討議会ではじめて顔を合わせる他の市民との会話について、どのように感じましたか（いくつでも○）

	n	%
さまざまな考え（発想）が聞ける楽しさ	19	70.4
さまざまな世代の意見が聞ける楽しさ	22	81.5
同じ茅ヶ崎市民としての共感や連帯感	14	51.9
はじめて会う人との会話における抵抗感	0	0.0
意見を言うのになれておらず、話しにくい感じ	0	0.0
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

複数回答可の設問であるため、参加者数（27）を分母として割合を計算した。その結果、「さまざまな世代の意見が聞ける楽しさ」が81.5%でトップだった。「さまざまな考え（発想）が聞ける楽しさ」が70.4%とつづき、「同じ茅ヶ崎市民としての共感や連帯感」が51.9%であった。また、これら以外の選択肢を選んだ人はいなかった。

したがって、参加者の楽しさの本質は、多様な世代の市民があつまり、そうした人々の意見を聞くこと、さまざまな考え（発想）を聞くことであったといえるだろう。さらに、茅ヶ崎市民としての「共感や連帯感」も回答されていた。討議を通じた市民の交流がなされ、そこに楽しさや一体感が感じられていたことがわかる。

では、次回に向けた参加の判断条件はどういう結果となっただろうか。

次に討議会の案内が届いたとき、「何を条件に参加を決めるか」を聞いた（図表10）。最も多かった回答は「内容・テーマ」で66.7%だった。そして、「日程」が55.6%、「案内があればぜひ参加したい」が51.9%とつづいた。「条件を問わず参加しない」は7.4%にとどまった。

図表10 今後、同様に市民討議会の案内が届いた場合、何を条件に参加を決めますか（いくつでも○）

	n	%
日程	15	55.6
内容・テーマ	18	66.7
謝礼の有無と金額	0	0.0
案内があればぜひ参加したい	14	51.9
条件を問わず参加しない	2	7.4
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

抽出をして参加者を募る方法から考えると、「内容・テーマ」により参加実態が変わってしまうと、

## まちづくりにおける市民の討議の可能性 (2)

「平均的な市民像」の設定が難しくなるといった別の課題が発生する可能性がある。よって、今後も、実行委員会においては、多くの参加者を獲得できるテーマ設定、テーマの言葉選びが重要となるだろう。また、日程の工夫にかんし、茅ヶ崎市の場合、担当課の提案を実行委員会で検討する段取りがある。このことは、実行委員会でテーマを慎重に選び、参加者が集まりやすくなるような検討を可能にしている。その際、市民にとって参加しやすい日程も、検討事項に加えるべきことがわかった。とはいえ、今回も幸いにも、案内状の送付が参加につながっていることが確認できた。これは、自治体からの招待状が参加動機につながる効果を有する可能性を意味している。次の討議会でも、別の市のイベントにも活用すべき方法といえるだろう。

つづいて、討議会の時間設定についての感想はどうだったか（図表 11）。「開催時間」の望ましさを聞くと、「3時間程度（今回同様）」が70.4%で最多となった。また、「2時間程度」（22.2%）がそれにつづいた。「4時間程度」という意見も、2名（7.4%）ではあったが希望が示されていた。

図表 11 開催時間についてどのくらいの所要時間が望ましいと思いますか（○は1つ）

	n	%
1時間程度	0	0.0
2時間程度	6	22.2
3時間程度（今回同様）	19	70.4
4時間程度	2	7.4
5時間程度	0	0.0
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

これまででも、3時間を一応の区切りの目安と考え、討議会の開催時間もそれに合わせてきた。それゆえ、討議会に参加してもよいかもしいとの感覚と重なり、市民の参加障壁が下がっていると実行委員会では考えてきた。そして、今回の結果から、「案内が届いたので参加してみよう」と感じやすい状況（時間的配慮）であったと判断できそうである。ただし、上でも指摘したとおり、「4時間程度」にのばしてもよいたの意見があったのは、十分な説明と十分な討議時間の確保の要望に関連しているといえそうである。

## 4. 文化・生涯学習と市民の討議

今回の事後アンケートでは、文化推進課による独自質問が何件か記載された。その結果をながめて、参加者の意識や気付きについて考えてみたい。

まず、「どのようなことがあれば自分が文化芸術の鑑賞により関心を持てると思いますか」（複数回答）では、「情報が入手しやすい」が77.8%と最も多く、「近所でたくさん催しがある」が55.6%とつづいた（図表 12）。

図表 12 どのようなことがあれば自分が文化芸術の鑑賞により関心を持てると思えますか（いくつでも○）

	n	%
近所でたくさん催しがある	15	55.6
夜間にたくさん催しがある	4	14.8
情報が入手しやすい	21	77.8
家族や友人等に誘われる機会が増える	11	40.7
今より経済的な余裕ができる	7	25.9
今より時間的な余裕ができる	7	25.9
小さな子どもを連れて行ける施設や行事が充実する	6	22.2
バリアフリーや高齢者・障害者応サービスが整っている施設や行事が充実する	5	18.5
茅ヶ崎のアーティストや作品、文化イベントが全国的、世界的に有名になる	12	44.4
関心がない・分からない	0	0.0
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

また、「茅ヶ崎のアーティストや作品、文化イベントが全国的、世界的に有名になる」に44.4%の回答が、そして、「家族や友人等に誘われる機会が増える」にも40.7%の回答が集まった。これは、文化芸術の鑑賞が、必ずしも大規模展覧会などの開催として理解されているわけではない点が興味深い。文化推進課による討議会のテーマ、また、文化・生涯学習とまちづくりの接続が、討議会を通じて参加者に理解されたのではないかと推測される。

つづいて、「茅ヶ崎で今より学びやすくなるためには、今後どのような取り組みがあればいいと思えますか」という聞き方で、文化・生涯学習にかんすることがらがさらに学びやすくなるための取り組みを質問している（図表 13）。

図表 13 茅ヶ崎で今より学びやすくなるためには、今後どのような取り組みがあればいいと思えますか（いくつでも○）

	n	%
講座、講演会などの充実	16	59.3
施設（学習できる場・交流できる場）の充実	16	59.3
学びたい人の交流の場の充実	13	48.1
会場の確保や広報等による市の活動支援	13	48.1
学習の成果を評価する取組（修了証の交付や単位の認定）	7	25.9
学んだことを生かせる場の提供（講座の講師・ボランティア活動等）	12	44.4
学習成果を活用した活動事例の紹介	4	14.8
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

## まちづくりにおける市民の討議の可能性 (2)

この問いでは、「講座、講演会などの充実」と「施設（学習できる場・交流できる場）の充実」に、それぞれ 59.3% の回答が集まった。また、「学びたい人の交流の場の充実」と「会場の確保や広報等による市の活動支援」がそれぞれ 48.1%、「学んだことを生かせる場の提供（講座の講師・ボランティア活動等）」が 44.4% という結果だった。

参加者が、身近な学びの「機会」と「場づくり」に期待していることがわかる。そして、交流の「場の充実」と「市の活動支援」の必要性は、市民のためのきっかけづくりが重要だという参加者からのメッセージでもあるだろう。さらには、「学びを生かせる場」が大切だという意見は、文化・生涯学習のプロセスが継続的であることへの理解と、そのような場を継続してほしいという願いとして受け止められるだろう。

もう 1 つ、学びの成果をどのように生かしたいかという質問も、その結果が重要だと思われる。「学んだ知識や技術をどのように生かしたいですか」という質問にたいして（図表 14）、「自分の人生を豊かにするため」が 96.3%（27 名中 26 名が回答）であった。そして、「地域や社会で活動に生かすため」も 88.9% で高率だった。

図表 14 学んだ知識や技術をどのように生かしたいですか（いくつでも○）

	n	%
自分の人生を豊かにするため	26	96.3
仕事や就職の上で生かすため	5	18.5
家庭や日常の生活に生かすため	8	29.6
健康の維持・増進に役立てるため	8	29.6
地域や社会での活動に生かすため	24	88.9
生かしたいと思わない	0	0.0
学習したいと思わない	0	0.0
その他	0	0.0

市民討議会実行委員会編（2024）

討議会を通して、参加者はときにテーマが難しいと感じつつも、他の参加者との話し合いを楽しみながら、文化・生涯学習と茅ヶ崎のまちづくりにむけて、市民としての自らの役割感覚を高めていったのではないと思われる。結果的に、担当課が願っていた「茅ヶ崎の身近な文化を生涯学習に結びつけ、そこから地域的発展の展望を描く」市民の討議が、着実に行われていた可能性が高い。これを 1 つの成果として、担当課にて、茅ヶ崎市文化・生涯学習プラン」がますます充実したものとなることを願うところである。

## 5. 本稿の要約と若干の示唆

事後アンケートの上のようなふりかえりから、今回も、市民討議会の意義の一部を抽出し、まとめにかえる。とくに、2022 年の拙稿（山田：2023）の記載内容について、共通の論点を見いだせることをインプリケーションとしたい。



### 1) 市民と自治体職員とのコミュニケーション

2022年レポートでは、「縮減社会においては、理由の交換・検討に基づく合意形成が果たすべき役割がより大きくなる」という齋藤(2019)の想定を引用し、討議会を通じてそのような市民のアイデアが形成され、自治体の計画づくりにも応用される可能性があることを指摘した。これを、「討議会にて『話し合われた意見』」とし、このような種類の意見が職員に聞き届けられる重要性を説明した。今回も、この意義と可能性がある点は同様であり、討議会が茅ヶ崎市にとって大切な参加手法であると考えられる。

事実、今回も、理由とともに参加者の意見が表明され、それらが現場で聞き届けられ、そのアイデアが報告され、閉会前に担当課からのリプライの形で自治体としての受け止め方が表明された。これは、やはり今回も、地域に積極的に貢献したいという市民側の思いと、話し合われた意見は受け止めやすいという担当者側の感覚があったからではないだろうか。そして、話し合われた意見がこうしてかわりあい、交換されているところに、討議会の大きい意味があると考えられる。

### 2) 討議会の「しかけ」——承認から意味ある応答へ

今回も、「討議における「意見の変化」や「市民の役割」として討議会の参加者全員に確認・認識してもらうには、やはり、討議会に何らかの仕掛けが必要であることも事実」(山田:2023)との認識に、大きな変更はなかった。やはり、参加者の「楽しかった」を「市民としての自覚」に変えていくしかけが必要である。

とはいえ、討議会と討議の実践にそのヒントがないわけではない。たとえば、同じ市民の話や意見を聞き、自分の意見を深め、理由とともにわたしたちの意見を語る一連の経験によって、討議会に一定以上の成果を見出すことはできた。とするならば、このヒントをいかさねばならない。たとえば、討議時間を討議内容にあわせてどのように調整するか、グループ討議の結果報告を参加者にどのように感じてもらうか、それらの意見が自治体でどのように採用されるかといった課題にたいするヒントとしてである。それらをあらためて、参加者が市民として施策の推移を見守り、その結果をどのように評価するかについての検討にもいかされるべきである。自治体が導入する討議会だからこそ、こうした行政プロセスにつながるしかけを適切に用意して、討議会をさらに意味ある応答に変えていくことが求められている。

### 3) 継続的参加の可能性

2022年のレポートでは、「一度参画した若者を逃さない」(松下:2020)意義も紹介した。市民討議会では「若者」を「参加者」と読み替えれば、今回(2023年)の参加者に継続的なかわりの機会を提供すべきであるだろう。そのため、今回のあらたな取り組みとして、閉会のタイミングで、今後こうした活動にかかわってみたい人に挙手してもらい、名前と連絡先を聞くことにした。結果、4名の手が挙がり、次の機会に何らかの形でかわってもらい候補とさせてもらった。

このように、「継続して参画してもらう」(松下、前掲書)準備については、それがたとえ簡単なものでも、「市民参加プロジェクトを支える市民(市民性を備えた人)の成長に連なる重要性」(山田:2023)を確保することはできそうである。ぜひとも、こうした方々の次のプロジェクトへの参加に期待したい。

## まちづくりにおける市民の討議の可能性 (2)

本稿においても、前回のレポート同様、2023年度の市民討議会を、主にアンケート結果から「記述」するにとどまった。そして、討議会の十分な理念的検証にはいたらなかった。とはいえ、記述を継続することで、討議会の意義が連鎖的に比較にもとづいて目に見えるようになった。そればかりか、あらためて、討議会の機能面が可視化できるようになったことを、大切なインプリケーションと考えたい。そして、こうした示唆を、2024年度以降の市民討議会に活用していきたい。もちろん、これらの検討作業によって、茅ヶ崎市の市民参加手法の拡充にむけ、貢献ができれば幸いである。

### 参考文献

- 荒木友雄 (2008) 「ガバナンスを考える」(村田・大塚編著『現代とガバナンス』酒井書店 所収)  
菅野雄 (2008) 「行政改革とガバナンス」(村田・大塚編著『現代とガバナンス』酒井書店 所収)  
齋藤純一 (2000) 『思考のフロンティア 公共性』岩波書店  
齋藤純一 (2019) 「合意形成における理由の検討」(金井編著『縮減社会の合意形成 人口減少時代の空間制御と自治』第一法規 所収)  
嶋田暁文 (2019) 「人口減少・経済縮小時代の合意形成——差異への着目」(金井編著『縮減社会の合意形成 人口減少時代の空間制御と自治』第一法規 所収)  
高橋秀行・佐藤徹 編著 (2013) 『新説 市民参加』公人社  
瀧本佳史 編著 (2005) 『地域計画の社会学——市民参加と分権化社会の構築を目指して』昭和堂  
茅ヶ崎市市民討議会実行委員会編 (2015) 「茅ヶ崎市市民討議会の検証」  
茅ヶ崎市市民討議会実行委員会編 (2022) 「令和3年度『市民ワークショップ』報告書」  
茅ヶ崎市市民討議会実行委員会編 (2023) 「令和4年度 茅ヶ崎市『市民討議会』報告書」  
茅ヶ崎市市民討議会実行委員会編 (2024) 「令和5年度 茅ヶ崎市『市民討議会』報告書」  
名和田是彦 (2019) 「ドイツ地域社会の合意形成文化」(金井編著『縮減社会の合意形成 人口減少時代の空間制御と自治』第一法規 所収)  
ヒーリー, パツィ (2010 = 2015) 『メイキング・ベター・プレイス——場所の質を問う』鹿島出版会 (後藤 監訳、村上訳)  
牧野篤 (2018) 『社会づくりとしての学び——信頼を贈りあい、当事者性を復活する運動』東京大学出版会  
待鳥聡史・宇野重規 編著 (2019) 『社会の中のcommons 公共性を超えて』白水社  
松下啓一 (2020) 『事例から学ぶ 若者の地域参画 成功の決め手』第一法規  
村田和代 編著 (2018) 『シリーズ 話し合い学をつくる 2 話し合い研究の多様性を考える』ひつじ書房  
山田修嗣 (2023) 「まちづくりにおける市民の討議の可能性——茅ヶ崎市市民討議会を事例に」(文教大学国際 学部紀要 34 (1) 所収)  
山本啓 (2004) 「コミュニティ・ガバナンスとNPO」(日本行政学会編、『年報行政研究 39号』所収)

### 参考ホームページ

茅ヶ崎市, <https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/> <最終確認: 2024年5月15日>